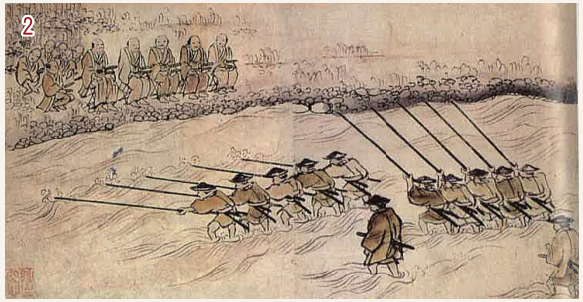
移住・開拓の先駆者「八王子千人同心」

⑦ 蝦夷地開拓移住隊士の墓



勇払市街地のはずれに位置する史跡公園には、勇払の開拓に関わった人たちの墓石がまつられています。まつられている墓石は、八王子千人同心関係の９人分、勇払会所関係の 10 人分、場所請負人関係の７人分、その他不明な３人分、合計 29 人分です。かつて墓石は、勇払原野に散在していましたが、戦後に集められて一緒にまつられました。最も古い墓石は、八王子千人同心が勇払に移住した寛政 12（1800）年のものです。

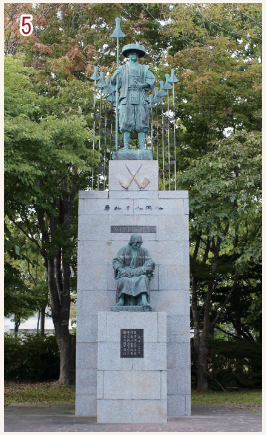
蝦夷地開拓移住隊士の墓
市指定史跡　昭和 31（1956）年 3 月 10 日指定
所在地：苫小牧市字勇払 132 番地 38
所有者：苫小牧市
管理者：苫小牧市教育委員会

寛政 12（1800）年、八王子千人同心は蝦夷地が外国からの脅威にさらされたため、蝦夷地の防衛と開拓を幕府に願い出ます。そして、組頭の原半左衛門を隊長に、その弟である新介を副士として 100 人を伴って蝦夷地に入りました。半左衛門は 50 人を引きつれて白糠へ、新介は勇払に入り、警備や開墾などに従事しました。さらに幕府の役人で千人同心の組頭であった、河西祐助も妻の梅と幼い子どもを連れて勇払に入りました。

千人同心は粗末な小屋を建て警備や開墾（かいこん）※1などに精を出しましたが、蝦夷地の気象と風土は想像を絶しました。過酷な生活で隊士が次々に命を落とすなか、梅は子どもを身ごもり、女の子を生みます。しかし、食べ物が十分でなく乳が出ないため、赤子は出ない乳房をしゃぶって泣いていました。やがて梅も病気になり、２人の幼いこどもたちを残して亡くなってしまいます。隊士も病にかかり帰郷する者や、病の辛さから割腹自殺する者など多数の脱落者を出し、４年で千人同心による警備と開墾は中止となってしまいました。半左衛門や新介らは箱館奉行に転じ、残った千人同心は蝦夷地にとどまりました。

蝦夷地開拓移住隊士の墓には、勇払で亡くなった 8 人の同心と河西祐助の妻梅の墓がまつられ、苫小牧開拓の先駆者として手厚く保護されています。

※1 開墾（かいこん）
山野を切り開いて農耕出来る田畑にすること



写真の解説
1 墓石を祀っている勇払開拓史跡公園の様子　2 千人同心が多摩川で槍先で水面に立つ小波を打つ長槍訓練を行う様子を描いた「長槍水打の図」（『桑都日記』東京都指定有形文化財）　3 人同心 野嶋儀信 像（野嶋 和之 氏 蔵）　4 八王子市の指定文化財となっている千人同心の甲冑（八王子市郷土資料館蔵）　5 苫小牧市民会館前の広場に建立された開拓記念碑（本郷新 作成）　6 開拓記念碑には赤ちゃんを抱いた梅の像が建てられている